

荏苒土品説

中央上

太

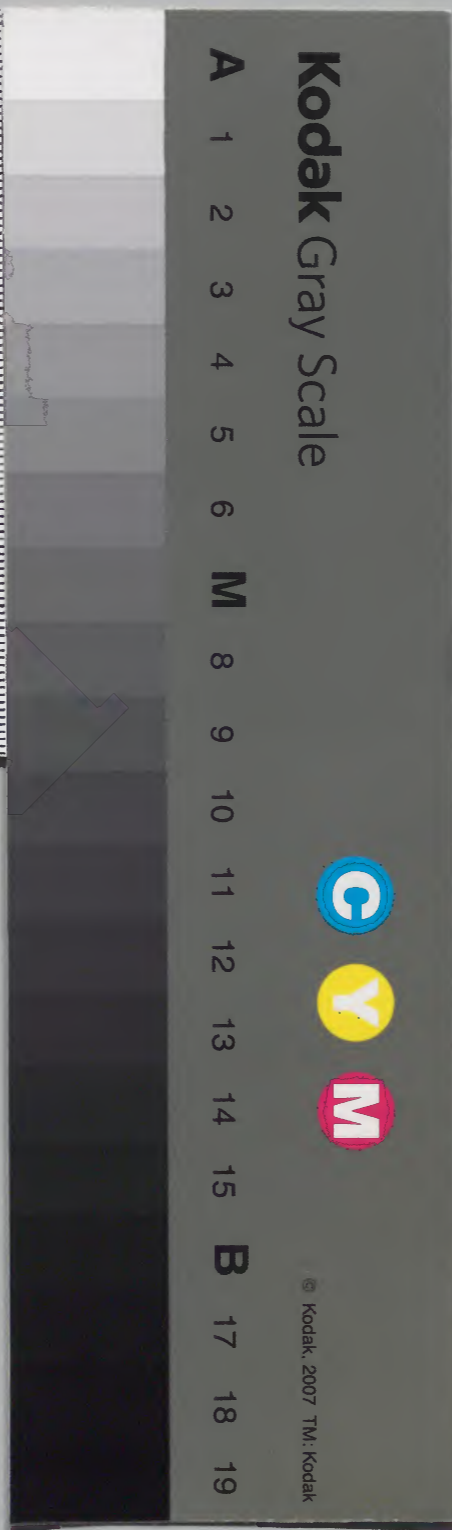
内務省圖書	
第.....號	第.....部
.....類部
.....函部
.....冊	共八冊

和書門	
八六	
一六	
一四〇	
八〇四〇	
類	號
架	冊

内閣文庫			
七四函	八六九	和	書
六八〇	架冊號類		

内閣文庫	
番號	和 8690
冊數	8 (1)
函號	174 86

174-86



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

成

凡此諸郡... 萬金... 其中... 府内... 府外... 千高... 役...

在土品說

中央上

28-111

新刊明倫彙編

一 凡江府四方金城を以て其中直ぐ味て府内府外

の欄あり諸候大夫の館舎圍繞一郷外町々工商

乃肆店軒を並庭阡陌の巷街賑ひ技桑第一の養

士萬國小勝を繁榮の地定小名蹟觀遊の佳境河

て一編の各と地理の書多し其類書を参考し

一 凡此書小江府の地事委き諸書古繪圖等或多く

輯免世小行色在致丸の教本遺漏を補ひ

増訂並を訂正と訂むと以て敢て自説を用ひ其是

一 なるを考へ採て疑を欠く耳

一 凡江府四方金城を以て其中直ぐ味て府内府外

一 凡此書小江府の地事委き諸書古繪圖等或多く

一 此類書を彙て筆記と云ふといへばと云か以て他書の誤をいふ以爰小訂正して置之覧於者具各と云ふも見て其異同を疑はしきあり
 一 凡古跡或神佛寺社の記事來曆佛事神事等の時日を正し瑣細の説は省き略を唯附會の説は是を除とあるは
 一 凡江府名勝地理を記せば書の起立はあらず先寛文の名所記を姑と云ふ此板本今至て得か
 一 次と天和の紫の一本今寫本あり又元禄の名所嘯と梓小は其外江戸免なり江戸を免亦あり今小多し然とも誠山里談近し然も元禄三
 一 の比江戸鹿子を免是より少し委し成れり又享保の由至也沾涼り江戸破子初續二編は金
 一 支巨細集ゆり是より世小流行して諸物と云ふ

一 元禄は是名所記より起りて編を成りたり大成とあり又延享亦名勝志寛延の末又鹿子再訂して名所大全と云ふれども破子世は用ひらるる故に鹿子再編功勞空しく發せし明和の末に至り破子再校して其訂正し疑説等を生する莫もあり沾涼の功と隱し或は其誤を其終に傳へしもあり於之江戸志の一編在り然もとも去方の藏本之由は此各改正増補あり
 一 物と云ふ物と云ふ類其上欠く事あり
 一 物と云ふ物と云ふ類其上下事あり
 一 誤謬とあるは
 一 誤謬とあるは
 一 誤謬とあるは
 一 誤謬とあるは

名所記何るを更を知り給はぬに残り多き更なり
一 今在世形りんは告俗事甚くを抄りて
凡此編輯録を更曾て予々丹誠小何は実小
古人の功大こと以具発起する処の報意を踏
階梯として是を手撰りてかまを足とて
次第小精功を尽し其志を継て年と積は以て大
成り及後のいさねとまると多しされと
其元成顧まらんばある趣りて編をなして更物
整ふ今や予先の各記を彙め参考して是小た
らさうを增益しおけたるを修補して総合す
更とあり思え来好ある道小あき遠き古
入と況んや不才誠と得る更難し既し星うつ
り物々あり陸谷変遷世の常草小してねまると詠

せしむさし野も宸第一の大都會とねん然是ぞ
治世盛んぬる餘潤又好子余々寸志成補助を給
ひ此上事々物々全く備はらんことを願ふ
殊に此編予が短才にて集成する処を恐れ
ハ謬誤あかり以唯其端を発して後者の訂正
と俟つこととす

此草本

安永二癸巳年發天明五乙巳年補

寛政十一巳未年十二月再書

武江城東本街第二
大橋八右衛門方長輯著

○江戸地理之書目

江戸名所記物語

寛文二壬寅年

松雲作

文化二道
百四十三

紫一本二冊

天和二戌年

光融入道書

百二十四

江戸名所新

延享三年

安勝子編述

同十五年

江戸雀

元禄初

江戸鹿子

延宝五丁巳年作者不知
文化二道
百二十八

改 江都總鹿子大全三卷

寛延四辛未年
再藤田氏或期堂華堂著

江戸砂子八冊

享保十七子年

菊園沾凉編

同七十四

同續編五冊

同二十年

同

初編再板

明和九辰年

誦政恒規軒

江戸名勝志三冊

享保十八七年

南陽子著

新編江戸志六冊

享保十八七年

東武懷山子輯著

近藤五右衛門藤原榮清明和元年五月為
大御番安永四年正月廿三日五十六才
鹿積校正飯田町住山人山田屋若右衛門
〇二二ト云

○引書目

武陽神社畧傳羽倉極兩傳
卷物一卷

一江府神社畧記荒井敦春著
享保十二年二卷

武江神祇祿本四卷

一諸社諸寺縁起書教社傳

落穂集知更新友山
大道寺老十卷

一武德編年集成木村高敷九十三卷

家忠日記

一南向茶話赤城佳浪士
酒井忠昌或忠明

求涼雜記

一芝山會稿大高李明
三浦氏作

事蹟合考

一見聞披

岩淵夜話

一旧叟茗談

諸家藏書陸詰圖教

一新安子筒

武藏あみ二卷

一兵家茶話

古今武鑑二冊

一瀨田問答

古今町鑑四五部

一江戸往古図長祿
中云寛永九

一江戸古繪圖江戸往古図慶長十二
• 明曆三酉年正月開板
• 正保慶安中
• 美應二年印

明曆三酉大火後井伊保科外御老中松平伊豆
 候御掛ニテ所御奉行北条安房候ヨリ久嶋儀
 兵衛ト申者ニ被仰付右下圖ハ遠近道印と云
 古辰物師ニ被下板行初テ成ル
 寛文十庚戌大繪圖道印製一分五間ノ積リ一寸
 同切繪図也
 延宝七巳未江戸方角安見圖
 天和二壬戌
 元録二圖鑑綱目
 元禄六
 元禄八亥道印製一分五間
 同十三壬子間者
 宝永四
 正徳元 正徳四甲午 道印製一分十間
 享保二
 同比大圖 享保七本所深川上
 同十四巳酉 元文
 寛保 延享以後数々
 此外引用数本雖有之書目略之
 武江圖解
 一 一分五間
 一 一尺五寸十間
 一 五尺四寸二十六町一里

武江圖解

折圖

一 一分五間
 一 一尺五寸十間
 一 五尺四寸二十六町一里

代醉編ニ繪圖設彩則宜山清水綠河黃路白
 今此圖色令則海川池水ハ縹と山堤原ハ緑と
 道路黄と寺社ハ紅と武館ハ白と町家
 灰と右彩色と以之分り

武江圖解
 一 一分五間
 一 一尺五寸十間
 一 五尺四寸二十六町一里

御城邊 内郭俗九内ト云

東常盤橋吳服橋鍛冶橋西半藏御門北田安一
橋神田橋南櫻田御門等御塹を限り内櫻田大
手籠之口和田倉大名小路等

御塹塹端四方

城東

俗ニ下町ト云

日本橋北

南日本橋江戸橋川通北銀町土手通
東八町堀靈岸島浅草川を限西御塹端

凡拾五町四方程

同

南芝口橋北日本橋茅場町中橋京橋
南邊東木挽町鉄炮洲築地海邊迄西御
堀

凡八町ニ五町程

凡六町程

品神

田每町駿河臺神田川通西上野御成道神橋

城西

白半藏御門外南麴町南永田馬場大番町西四

谷御

喰違ニ限リ

城南

外櫻田御門虎御門山下御門幸橋内霞ノ関邊

城北

田安御門外飯田町御留守居町臺所町牛込御
門内小川町猿樂町邊 凡十町四方程

府外壕四方

・南

芝田新橋南愛宕下増上寺芝新堀金杉

田町大木戸迄 九北五町十五町程

西窪 愛宕下西土器町赤羽橋新堀至 飯倉

町邊迄 九五町二十町程

三田 新堀南臺町伊皿子二本榎迄

白金 三田西南新堀南鷺森豊沃大崎迄 九十町二十町程

目黒 白金洪西南上中下目黒戸越碑文谷池上

矢口二至 九十五町四方程

品川 高輪南北品川敷洲鈴森大井古河六郷並

川崎 高輪南北品川敷洲鈴森大井古河六郷並

赤坂 赤坂御門外紀伊殿館舎徳馬町田町一木

葎研坂築地今井三河臺九十町五町程

青山 赤坂西權太原久保町原宿隠田百人町

麻布 赤坂南谷町市兵衛町六本木永坂日窪一

本松百牲町九九町四方程

渋谷 青山西南長者丸葎橋道玄坂宮益町世田

ヶ谷道 九十町四方程

小日向 西北 九十町四方程

四谷 四谷御門西徳馬町忍原大木戸内藤宿追

分喰違外葎橋千駄ヶ谷世代木鳴子淀橋中

野角苦幡ヶ谷 九十町七町許

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

一ヶ谷 一ヶ谷御門外木村まんちりヶ谷加賀屋敷原

町榎町辺迄 木林 凡十町十五町程
大窪 谷木村西七面百人町 凡七町四万程
牛込 御門外江戸川辺川田子窪早稻田築地
高田戸塚落合辺 凡十町十五町程
小日向 牛込西北江戸川舟河原金杉上水端音羽
町関口目白清士雜音谷 凡十五町十五町程
北 小石川御門外水戸殿館舎徳通院辺白山
御殿址茗荷谷鶯鴨大塚辺板橋至凡十町余
小石川北田畑染井西原平塚王子辺豊嶋
川口 凡十町十五町程
湯嶋 昌平橋外明神天神辺池端向園辺 凡十町
赤坂 赤坂御門外湯嶋新田 凡十町十五町程

本郷 湯嶋西北丸山森川宿追迄湯嶋入組
下谷 湯嶋東御成道長者町池端忍園上野山中
坂本箕輪金杉根岸至 凡四十町十町訂
谷中 忍園後三崎新堀道灌山三河嶋 凡
浅草 浅草橋外御藏前駒形堀田原元鳥越新堀
南品川 端阿部川町西下谷隣新寺町東門跡前觀
喜花川戸山宿待札山下橋場今戸山谷小
塚原新吉原中田南東大川限 凡四町十町訂
東
本所 浅草川東立川南北石原中郷小梅柳嶋押
上牛嶋洲崎寺嶋木下川亀戸小室井北
隅田川南小名木川猿江大寫限 凡三十町訂

深川

永代新大橋向本所南御舟藏六間堀永代
嶋洲崎海手塩濱十方坪破村邊り中川限

○江都北極星出地三十五度半或三十六度ト云

○江都疆域

南品川限 坤目黒限 西四谷中野限 乾上板
橋北板橋川口千住限 長隅田限 東中川限
巽築地鉄炮洲限 棘岨三哩許

○江都諸方路程

自日本橋 南之方 幸橋三町 虎御門七町 汐止橋町七
本京橋 新橋 源助橋 増上寺 愛

岩町

山王 金杉橋 築地 鉄炮洲

濱御殿

靈岸嶋 芝太佛 元札

大木戸

品川 白金臺 御

段山

行人坂 目黒 大寄 池上

新田

大師河原 麻布一本松

三田

臺 三田

西之方

半藏御門 麴町 平川 天神 赤坂御
門 氷川 四谷御門 四谷追分
大木戸 子駱谷 十二社 鳴子
幡谷 堀内 練間 中野 下
高井戸 門上高井戸 井頭 府中
神大寺 青山山 青山善光寺

淡谷金王七ノ溜池山王三ノ世田ヶ谷三ノ繁橋
高田一ノ御門三ノ牛込御門三ノ原町六ノ
大塚一ノ雜司ヶ谷一ノ穴八幡一ノ護國寺一ノ
練間一ノ小日向一ノ池袋一ノ水戸

北之方

和泉橋十三新橋十四筋違十三神田臺明神七上
野橋十四湯嶋天神七小石川御門十五本郷追分北三ノ
駒込一ノ谷中四ノ日暮里一ノ染井一ノ尾久十七ノ
王子一ノ三河嶋一ノ庚申塚一ノ鶯鷓一ノ雞声
窪一ノ川口一ノ岩淵一ノ板本一ノ根岸一ノ浅草
上板橋一ノ根津一ノ板本一ノ根岸一ノ浅草
御門一ノ觀音一ノ金並一ノ山宿追分一ノ吉

待乳山一ノ真崎一ノ千住一ノ酒
橋場渡一ノ西新井一ノ新井一ノ橋一ノ後一ノ田安一ノ
禰田橋一ノ橋一ノ後一ノ田安一ノ

東之方

兩國橋一ノ新天橋一ノ白永一ノ伏一ノ筆一ノ五
百羅一ノ灌一ノ木下一ノ逆井一ノ渡一ノ寺一ノ馬一ノ
小松川一ノ源森橋一ノ吾妻森一ノ新宿一ノ出一ノ業平
橋一ノ白源森橋一ノ吾妻森一ノ新宿一ノ出一ノ業平
園一ノ深川一ノ洲崎一ノ中川一ノ行徳一ノ
常盤橋一ノ真間一ノ和泉倉一ノ教壽屋

南有橋大寺ノ直一ノ品一ノ出一ノ日本一ノ計一ノ野一ノ

○從江府諸國出口以日本橋行程定

南官道東海道口芝弓品川驛出

至京師三條橋狹栢城四里至大坂百三十一里至長

崎海陸三野餘

近國相州鎌倉餘二里同江嶋餘三千里同大山

野十同箱根林四里三本林野餘三千里

西官道甲州路口四谷追分高井戸驛出

至甲府狹野同身延山三十四里武州八王子野

同青梅野四谷追分餘中同秩父野四谷出

北官道中仙道口跡增本郷追分下板橋驛出

至京師野餘四信別善光寺野四里碓氷嶽三野

同官道日光路岩泷通川口宿追三里岩附路本

外郷追分湯川口出半里

同官道奥州路口浅草橋千住出

至仙臺城下九野水戸路水千住出

岩附路九野通日光路相通三里久喜野十通

栗橋計地埋下総関宿野三

同間道川越路出巢鴨野上板橋

東間道兩國橋葛西出市川通

至鹿嶋野二里但舟路新宿野松戸出

相州三崎舟路十上総キカラ舟路

品川

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

○御定駄賃并人足賃錢自江戶
品川迄 荷物一駄 九拾四文 今百十七文

同前 荷物一駄 九拾七文 今七十文
同前 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○千住迄 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

同前 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○川口迄 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

同前 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○板橋迄 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○上高井迄 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

同前 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○下高井迄 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○内藤新宿 荷物一駄 九拾七文 今五十二文

○泊々之木賃錢

品之人之人拾七文

○內百住之人拾七文

馬之七拾六文

右所定所高札

此度内藤新宿繼場相成付緊賃人足賃錢

内宿新宿連

荷物之緊六拾七文

兼裁為人九同所

人足之七拾四文

○上高之屋連

板橋之

同所

明和九年二月

○諸候第宅上屋敷下凡數百六拾五所外御三ヶ所
○同別業中下屋敷凡四百六拾六所御三ヶ所
右中下合七百三拾四所但抱屋敷補不詳

○江府神社惣計大概二百餘社

○同其寺院凡百餘所有奈宇古殿之殿谷田寺前

○但淨土宗所出寺凡百餘所以來理百箇寺通

○天台所出寺凡百餘所以來理百箇寺通

○真言所出寺凡百餘所以來理百箇寺通

○淨土真宗所出寺凡百餘所以來理百箇寺通

日蓮宗

○西御堂町日本書院

○町幅定 日本橋通町道幅 田舎間 本町通り 間
七間或ハ六間
五間之地在之

○江府町数 但大畧之積其詳ふる者ハ不知
凡一千六百五十町許

内町方分一千二百有餘町
寺社門前分四百有餘町
此内小町二百十町是ハ間敷
三町間以中ノ町ノ小町ト云フ
之ハ内小町三百十有餘町

但寺社門前町延享二七年以來町方所支配と
此外増上寺門前浅草寺領等の類各町各有
之分元來町方支配之古町之内江加此寺社門
前之内江不加

○同町方分男女惣人数 但大畧之積其詳ふる者
凡四十七万八千八百六十有餘町屋分四十三万
門前分五万五千
天明八年頃考之凡九万九千七百

但所用達能役者町宅武家之分除之
或四十七万八千四百八十
身但年々増減有之ハ是也
凡十一万九千七百
當当地出生凡九万五千

○町觸出 凡町銘元分七百五十五町程ト云
御府内公役金出 凡町々合七百廿八町ト云

○御祝儀之筭御能拜見 凡出古町之合
凡三百五十四町
此如人數五千百十八人其町

本町四町分 同三町目裏河岸 大徳馬町分
通籙籠町 同油町 横山町三町分 元濱町
檜町一町目 村松町 本草屋町 金吹町

本石町 加丁 岩附町 本銀町 加丁 金鉄炮町
小徳馬町 加丁 馬喰町 加丁 兩替町 大呂町
町 瀬戸物町 伊勢町 北鞆町 安針町
町 同裏河岸 室町 小田原町 行 堀江町
本船町 小船町 堀留町 行 堀江町 小網
町 箱崎町 兩新堀 二丁 金北新堀町 甚丸
衛門町 元大坂町 堺町 同横町 物吉町
住吉町 新和泉町 新茂木町 新架物町
長五郎屋鋪 庄助屋鋪 長谷川町 富沢町
新大坂町 弥兵衛町 田所町
吳岸鳩町 四日市町 塩所 濱町 川口町
長崎町 銀町 四町 龜井町 橋本町 元
柳原町 久右衛門町 佐久間町 綱 浅草平屋門
町 同茅町 同瓦町 同天王町 同森田町

同 新和 神田 緋屋町 三 元 兼
物町 白壁町 鍛冶町 松田町 鍋匠 長通
新石町 須田町 片 連 窪町 新葉屋町 新
石町 大和町 龍閑町 鎌倉町 同横町 塗
師町 三河町 早 雉子町 只軒町 新銀町 横大
子町 関口町 南 蠟燭町 神田 新銀町 横大
続 同横町 切通片町 玄 桂屋鋪 本郷 錦町
日本橋通 西河内町 吳服町 元大工町
南大工町 道寿屋鋪 三 鳩屋鋪 数奇屋町
檜物町 同会所 上 模町 萬町 青物町
元四日市町 下 模町 檜物町 新右衛門町
南油町 下 岩倉町 川 世石町 危内
町 平松町 本 株木町 南 徳馬町 金 鈴木

町 以有町 具足町 折町 南炭町 金太町
水谷町 南塗町 南鍛冶町 南鞘町 大鋸町 桶町
南榎町 會所 南緹治町 立良兵衛町 疊町
西緹屋町 同北緹屋町 新肴町 彌左門町
左門屋鋪 南緹屋町 瀧山町 守山町 大惣子
鐘屋町 南鍋町 山町 山王町 子作屋
郎町 南大坂町 内山町 加賀町 八閑町
敷山 下町 南佐柄木町 喜左門町 山
寄合町 佐兵衛町 元飯田町 麴町 市谷田
城町 菰波町 元飯田町 麴町 市谷田
町 船河原町 四谷徳馬町 元赤坂町 同
徳馬町 銀座町 同河津 尾張町 同
河津 竹川町 同河津 出雲町 同河津
芝口行 源助町 露月町 柴井町 宇田川

町 同横町 入神明町 濱松町 新網町
芝松本町 富山町 永井町 三嶋町 七
軒町 中門前 大片門前 南茅場町 本
八町 堀平 幸町 日比谷町 本湊町 松
屋町 永松町 十軒町 明石町 南飯田町
上柳原 南本郷町 南八町 堀平 南小田原
町 木挽町 櫻田 兼房 備前 鍛冶 泉
町 伏見 善右門 久保町 太左門町
本所柳原 入江町 長崎町 清水町 徳
右門町 茅場町 花町 吉田町 新
坂町 以上

○御役屋敷

○御評定所辰口

御評定

或日 每月 立合 四日

詰

廿日

但正月八日或日初り

△或日立合一座御役人

寺社御奉行

御勘定奉行

中勘定吟味役

儒者目安讀

中勘定尻

評定留役

中坊主尻

評定所留守

中目付

料理方

中同心六人

并同心尻

或日御老中一人

大目付二人

此外三奉行諸役人方

公更新詔立合

立合

此外諸奉行役人

○西町御奉行所

内寄合六日 六日 七日

布政司

騎士女五口

安卒百廿口

常盤橋内北御番所 文化三年大火後 寄屋橋内南御番所

○俵葵屋敷

辰口

毎年三月

公家礼

参向

第廿旅館

○火消御屋敷

万治元年始八組其後寛文二年二組増し十組となり 元禄八年十五組となり 寛延元年の如し十組なり

八代洲河原

御茶之水

小川町

飯田町

市谷存坂

麴町下目

四谷御門内

赤坂御門外

溜池上

以上十ヶ所

○所書替所役屋舗

二ヶ所

浅草猿屋町

○所金藏

所城内に在

○所米藏也奉行役屋鋪 本所所米藏北大川通橋際東七入四軒屋敷云

○所船番所 永代橋際新堀川口 吳岸嶋

○所船手役屋鋪 司船所 新堀川口 上村猪十郎及

吳岸嶋 吳岸嶋 吳岸嶋 吳岸嶋

○万年橋一所 永代向 一所 所濱一所 本所推木

○川船坊子改所番所 本所橋場

○少川船及極印 霸清三郎及役所 本所推木

享保六七年棟梁鶴飛驒支配とも云

○御厩 西中丸下 霞ヶ関 和田倉 櫻田 永田馬場

○御春屋 平川出門前

○御置藏

○御船藏 本所 元西四西岸の地、貞享中堀田屋前守殿安宅丸所船取明一相成

深川 高橋際所 吳岸嶋 永代橋西詰一所

○永代橋東相川町 一所

○御米藏 浅草御藏 本所御藏 元二百五拾余戸ト云

元禄十一年比西園御米藏築本願寺東西岸海端に移されしる小米共沙風ニテ物ナリ由

穀倉所 諸邦ノ歳貢賦粟轉輸于此 諸士月俸及各項ノ費用於是支給焉

本所御藏ハ元御米藏よりトシ享保十九寅年の比御米藏ハ後江ニ移され跡の地御米藏ト云

○御材木藏 本所後江

○御焰硝藏 四谷千駄ヶ谷村 鳥銃所

○元表大番町西南有る故今元下焰硝藏ト云

○御焰硝藏 製法所 多摩郡和泉新田

○施藥所 養生所ト云 小石川白山御殿旧地御薬園内

享保年中立

○御薬園 小石川白山御殿旧地 目黒駒場

○養育所 深川茂森町

天明四辰年立

○人參島 田安御門外

近年朝鮮種人參と稱せらる

○御鷹部屋 駒込本村 同千駄木 同

雜司ヶ谷

○小普請定小屋 辰口

○御作事定小屋 同所 脩理城所

○測量所 領曆調御用屋敷 浅草鳥越

天明元七年建

元柳原佐久間明地在

○御改正役所 浅草掖屋所 藏前札差貸出金會所

寛政二戌年建

○町台積金取立會所 兼 叔藏 向柳原

寛政子年建

○同叔藏 新大橋向立 柳原内立

○窄屋鋪 小俵馬町二丁目 石出帶力

御本丸

諸所御見附

都合三拾六所云

大手御門

上方石以上御譜代大名方御在
又八八石石程也

内櫻田

指授所云云
大手の格也

坂下

御先手及並子口同心

大手御門

御本丸大手口同心

和田倉

二二万石御譜代

馬場先

一二万石御譜代

日比谷

一三万石外様大名

外櫻田

五六万石御譜代又外様也

半藏

一二万石御譜代又外様也

西御番所

百石以上寄合元

田安

一二万石御譜代

清水

百石以下寄合元

竹橋

二二万石御譜代

平川

御先手及並子口同心

雉子橋

百石以下寄合元

一ッ橋

一二万石御譜代

神田橋

五六万石外様

常盤橋

二二万石外様

呉服橋

一二万石外様

鍛冶橋

二二万石外様

数寄屋橋

百石以下寄合元

山下

百石以下寄合元

幸橋

一二万石外様

虎御門

百石以下寄合元
六七千石

赤坂

百石以下寄合元

四谷

同断
大草出也

市谷

同断

牛込

同断

筋違

同断

浅草

同断

濱大手御門

同断

日本橋

同断

御邸内御門

御番仕

梅林御門

上御留守番子口同心
下御先手組子口同心

蓮池御門

御先手及並子口同心

紅葉山下御門

御先手組子口同心

御切手御門

中丸中裏出門ト云
御切手番及並同心

二丸喰違

御留居子口同心

塩見坂御門

塩見番子口同心

二丸中仕切

添番支配

二丸銅御門

大由番子口同心

大手三御門

百人組及並子口同心

中御門

御持組

中雀御門

御書院番子口同心

御玄關前

御書院番及並子口同心

山里

御先手及並子口同心

御墨所口御門

御先手及並子口同心

中仕切三重橋前

獅子口

西丸大手番所支配

西九

△御表御門 中書院御表及并子力同心

△富士見御番所 富士見番及并組

△御天守 中書院御表及并組

△上埋御門 中書院御表及并組

△失來御門 當番持同心

其外河邊とて詳し知る是の如く

或云御城内外御門以上三拾処外御見附廿七処

下云

○御高札場 以上六ヶ所

○常盤橋御門外 ○日本橋南詰 ○浅草橋御門内

○筋違橋御門内 ○半蔵御門外 ○芝車所

但日本橋御高札夫來外ニ享保中ニ牧建諸國新田之事三笠博奕之事

○本陣 ○火子付者有之者詔人多可出御高札所

○赤坂俵馬町御堀端 ○市谷八幡町御堀端

○牛込揚場町御堀端 ○南湊町高橋東詰下首

○芝田町四町目 天和中ニ立卜云

○浦高札 三ヶ所 諸ヶ海宇大川端有

○本芝浦海宇 ○明石町海宇 ○深川熊井町大川端

○物揚場高札 十四ヶ所 諸ヶ御堀端有之

北緝屋町 教寄屋橋 塩留橋 鎌倉町

松屋新橋際 淺草茅町御堀端 本町堀首 箱崎町裏通

呉服橋際 牛込揚場 鍛冶橋外 難波橋際

芝口一町目 八町堀稻荷橋

○是ヨリ東御堀端七荷物可揚高札 一ヶ所

土橋御堀端物揚場

三九

△喰違平川口 中先手持平川口

△同御寶藏 同四百石言

△新御門 中先手組

△下埋御門 上目

○茨捨船御高札 十二ヶ所
諸々御堀端川岸海宇建 江戸中より河くく控船津川幾津浦
後茨捨場より川より控

○此堀之水とあり又小渠とあり河とあり控
間鋪高札 四ヶ所

○櫻田善右衛門町御堀端
○麩町十一所自同
○市谷田町三町目同

○流水御高札 二ヶ所
○新木場
深川佐賀町下の橋際

○此橋北之方町屋之河岸在郷船不可着之
○本郷町河岸 一ヶ所

○此明地火事之幕諸具出と間鋪札
○諸々火除明地 十二ヶ所

○橋札 六ヶ所
○東湊町高橋際 一ヶ所
○石橋南詰 一ヶ所

○木挽町四ヶ所五ヶ所橋臺 二ヶ所
○南八町堀一丁目橋 一ヶ所
○佐久間町新橋 一ヶ所
○北新堀湊橋際 一ヶ所
○濱御殿二十五門橋際 以上四ヶ所
○浅草橋御門際 一ヶ所
○浅草御藏脇石垣際 一ヶ所

○橋札

○兩國橋東西橋臺 同橋中
○新大橋 同新
○永代橋 同新

○此橋の上において昼夜にかきつゝは住米の輩一五

やま〜〜〜魚〜〜〜火事の時橋の上滞り〜諸
新大橋永代橋
此橋のよ〜〜舟の月〜はめて一切打へ〜

船渡一賃銭之札
浅草三好町河岸
同枚本町河岸

殺生停止之札
南浅草諏訪町河岸
北聖天町河岸
此札元禄五申年建
以間十三所辛酉間余

新島越橋
同下所
新島越橋
同下所

江戸端々此二所建
切支丹
火事出来
火を付る者
在りて銃炮

捨馬高札
新島越町堤下り口

鷹番高札
本所中之郷
山谷町
新島越
猿江町
橋場町

遊女之類制禁衆物無用御高札
新吉原大門外
一言所
文言吉原之所
悉く記す

江戸御高札場
都合百拾八所
外上野領り

○塗御高札場

○芝口橋際 享保中ヨリ建

○澤杭 海上所々澤ニ建

○品川沖 生麥沖 金杉沖 惣合ヲ捨キ本 上総澤

○河川の列 同三枚列

○江府内外ヲカツ傍ル場所

元禄十一
寅年建 此杭より内小荷駄馬口附之者無之者不可乗者也

浅草追分 浅草新堀 下谷御伎所 下谷廣徳寺前

谷中清水谷 駒込自赤不動前 駒込竹町 小右蓮花寺前

小日向水道町 雜司谷四ツ谷 但取テ
辻番所 牛込榎町 市谷柳町

市谷加賀屋鋪 市谷片町 四谷大番町 敷川橋紀伊國坂

青山御掃除町辺 麻布雜色町 渋谷箕橋 増上寺切通

芝牛町喰邊 本所高橋 本所辻橋 二本榎先
江下辺

本所之羽橋 本所横堀 同万年橋 同業平橋

同源兵衛橋 以上二拾九ヶ所

○所々馬々並の場

○馬喰町 江都第一舊キ馬場ト云 園ヶ原御陣之時御馬揃有リ所々

○神田橋御門外 櫻馬場 御茶の水馬場ト云前々々所々

○浅草榎寺後口 元柳原新三橋久右衛門町代有
寛政五年此地引射大的舊古場トモ引

○浅草觀音後口 本所電沢町後 ちんの本馬場ト云

○小石川築地 小日向

○三番町明地 近年出来 裏四番町明地 前々々在

○四谷尾州御屋鋪西 方明地 享保十巳年十月成

○麴町三丁目四丁目明地 享保十巳年十月築

○高田馬場讀 麻布三河臺 麻布永坂所明地

○芝新馬場前之在 增上寺裏享保七年 木挽所享保三年 自裏天明五年

○馬場先御門内明曆元年九月 朝辨馬場田安御門内

○永田馬場名の 馬場の場

○芝飯倉的場的場 湯嶋的場的場 同馬替場預

○大的替場福富町 麴町三丁目裏

○江都二六時中鐘 鐘役 辻源七

○本石町三丁目新道 鐘役 辻源七

先祖南都奥福寺喝食蓮宗と云僧之由

大神君三河被為成御座候節御誼初嶋臺作花献

奉還其後江戸七朝暮二時之六時相勤

台徳公御代鐘被仰付十二時相勤此節西御丸鐘拜借其後

新規鐘鑄之被仰付由

○王鐘役錢所々四百所余家持一軒より二年四拾八錢之出入日本橋

南之芝金杉橋迄西、飯田町麴町北、本郷迄東、浅草三好

町辺迄云

○本所横掘 鐘役 勘右衛門

本所町々深川小谷木川通り武家町方寺社方々役錢刻出

武家大小六百軒程 寺社千ヶ所程 町敷二百三十町程

○上野山門脇 鐘役 相木源兵衛

役錢上野坊中下谷浅草本郷駒込武家屋敷町方上野向奇町出

○浅草寺安天山

浅草寺々役錢差免元浅草領町々出入今不出

○市ヶ谷東圓寺 八幡隨身門

八幡境其臺番町筋武家屋鋪より被達役銭出所方へ不出

○芝切通

若松藤石衛門

愛宕下麻布筋三田辺武家方九拾八軒相對して芝切通方へ不出

赤坂圓通寺鐘近年六時兼音あり

○江都町中火之見櫓石也

所々所々有之凡々所高以前百々所之今其外絶た有之を
高々三丈一尺也定法の

○江府上水

○玉川上水

兼赤中始て泔城下上水ト成 四谷山門大株より泔

城内入又一口赤坂留地端万年榎芝の方北、京橋

より銀座町の方芝口数寄屋町櫻田西久保辺至り南

金杉橋を限り東南茅場町八町堀南北新堀又岸塙

至り西麩町四谷辺より明暦元比より大芝辺木挽

町築地迄の凡所数百七拾四町許ト云

○神田上水 源武列多摩郡井の頭池

寛永六己年御城内御茶の水と成玉川を以て助水と

小石川水戸家御館内より水道橋並に大樋御城下

町々通と西、御郭内北、小日向水道所小石川春日

町神田筋邊橋内神田町々柳原土手を限り東、

浅草山門大川を限り下町辺日本橋向南、京橋を

境、箱崎新堀坂町より又岸塙小細町八町堀茅

場町辺迄凡所数合二百六拾八町許ト云

○ 右西水道が所々合四百畧戴町程水銀出ると云

○ 千川上水廢址 下谷浅草辺水道

源も玉川の内と云万治寛文の比始ると云享保七

八比絶を安永九の比より再ひおこし天明

始比成玉川分水水口と田無村關前村の間分り

練間を経て上板橋より鶯鴉至り駒込富士前本郷

湯嶋がり下谷浅草東迄及了天明六十年相止

○ 白堀上水廢址 本所北の方綾瀬川の流を

天和貞享より宝永比迄本所北の方綾瀬川の流を

紫平橋筋へ引て本所中懸る今紫平橋東北の方

橋際より葛西領世繩村方へ通りて小川の流を有

是其跡なりと云

○ 武州豊嶋郡峽田領江戸

武州豊嶋郡峽田領江戸

御廓内大槩

御壕塹端四方

御内戸門門塔作大井也

物産御云江戸の水戸坂戸令戸花川戸をさし地老り多し戸口

名ももへし可成跡也

考江戸の江戸の字は大河の流古所望りしより江戸の字は

此江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は

江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は

江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は

江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は江戸の字は

右西水道... 下谷... 草邊... 水邊...
子川上水邊... 湯島... 白懸上水邊...
天... 永北... 本所北... 方... 護... 瀬... 川... の... 流... 石... 所... 今... 業... 平... 橋... 東... 北... の... 方... 今... 業... 平... 橋... 東... 北... の... 方... 今... 業... 平... 橋... 東... 北... の... 方...

江州風土記 江戸

○江州風土記曰江戸或在土... 假粟三百二十七丸三毛田貢牛馬濱荻阿
公穀五百九十二束三字田假粟三百二十七丸三毛田貢牛馬濱荻阿
無見與呂伊等充左馬察與武庫司
東江姑紅切音公江貢也出珍物可貢獻也川大者曰江戸候古切胡止也
其内曰户外曰門俗作戶非也
物茂郷云江戸水戸坂戸今戸花川戸あと云地名多戶口寄ての
名なるへ一と可成謬出
考ゆ江戸の号ハ大川の流を望りる所ハ江戸の戸口といへる
意て号ハ協成へ一既ハ江戸近き近江といひ江遠き遠江と云え
此江戸といへる名も至て久く旧記も在土と出るなれハ昔ハ
在の多き土地也ハかくも名付侍りしやされハ在原郡と云

しりまゝに在土の名據^{モトコ}ありと云へり

南向茶話云酒井忠昌南亭江戸の号は江戸の望りも意成へト云り

國初以前今の雉子橋外北の方大沼あり是より西の方と云は本

坂下迄入江して有りし小川町と寛永中外曲輪を以て以前々牛込

より流を船河原橋の向へ直りし木坂の方へ流を又小石川の流

は今の三崎稻荷の辺より橋堀の川へ流るゝと云り是より江戸の

号在と云へり

東鑑あり江戸と名乗ル士は江戸はと云は江戸の地名其比すも

有しと見えきり

梅より長祿元年太田入道道灌當城に城墾初て築ると云地は今の

西の丸のりりの由然り其比立山の僧贈られし詩も江戸

の城と在て別号ありされは其地名よりて名付られし成へり

又云其比近江戸川の流を飯田町の下真名板橋より

此方より今の平川口を通りて今北銀町油所濱町は行く氷筋あり

由是を平川と云り此川を隔て北の方を神田の郷と云柴崎

村今の神田橋南の方を江戸の郷と云則今の御城辺古くは江戸と

号せし地と思われぬ今元四里四方程の地をさしての惣称と成り

しりまゝありん類を以て考る小槻州大坂の城元は石山の城と云へ

るは旧名々然る小城築有て城内鷹木坂と云を大坂と号し城を

大坂の城と号せし以後其地の惣名小呼へり江戸も其類なり

中臣拔薙曰信筆戸神宮菅原江戸と云所其元古シの地なり今四

里四方の惣名と成り既大古人皇大祖神武天皇大和國橿原

都に五ひより自然と後世大倭を以て日本の惣称となれる如

あゝいゝる小明々との月窓よりさへ入虫
祢さりて都おひき物とて河をさうりとの空の月をさるるか
高野山梅察をさぬ紀行八月三日夜江の城を出る其夜入江舟
かゝりてりり

流を行末のまゝか白波のりる身りむ江戸のりるを
或云江戸ハ豊嶋郡の庄名ハ天正の頃常陽水戸の城ハ在り江戸但馬
守重通祖先累代當所の領主なり故称号と云云江戸氏の支下
ノ委敷出せり白石先生曰諸国莊園頼朝の代地頭職を補せり今々
庄号あり在之哉國郡郷ノ河ハはるハ大ノ庄名と云其内江戸
ノ庄名と思ひ江戸川越流谷あり頼朝の時大名とて河ハ皆々
丈夫先の庄名故て河ハ齊藤實盛ハ長井の庄此別當ハ補せり
よて河ハ江戸ハ今天下の大都會と云れハ究置きを此支え

同云東鑑ハ江戸川越葛西ありの支見ハ先の支ハ見不及又河
越の庄と東鑑ハ見也江戸ハ庄名と思ひれハ庄名ハ河ハ誰
ハの叔建せり庄ハ江戸ハ其庄官とて河ハ太平記ハ江戸遠
○江戸ハ東鑑ハ江戸の子孫ハ叔近き比家ハ北見久太丈夫ハ太平
記の江戸竹次の子孫とて矢口の社をハ遷られハ支ハ有之北条家の
頃迄江戸と稱せハ叔當代大都會の地名始ハを云ハ河ハ
く他年搜索をせり云れさるハ云下畧ハ云ハ河ハ
寛永九江戸古図ハ武列豊嶋郡江戸庄圖と云ハ河ハ
○文明の頃江亭記ハ江戸城云有全文を省畧して其要文を出ス
関在形勝之雄以武為冠武者大國也其山木奇傑而兼要隘者江戸其
武之冠乎下畧

同江亭記

武州江戸城者太田道灌源公所肇築也自關東與公差肩者鮮矣固一世之雄也下略

○同田の御事等時云々武州江戸城者太田道灌源公所肇築也自關東與公差肩者鮮矣固一世之雄也

蓋武之為州也以用武為名甲名四十萬應卒如響乃山東之名邦也江戸之城於是乎在雄據其要而堅備其壘所以一人當險萬虜不進亦乃

武州之城也○同田の御事等時云々

○江戸氏の支諸書見當りしはを爰に出せり猶正し此を得て後之改むへし

常陸國志小云水戸城主江戸但馬守道勝長子道房道鶴勝道忠道重道江戸但馬守重道天正頃城主祖先累代武州豊嶋郡江戸と領し故

江戸を以称号と云云江戸ハ豊嶋郡の名くと云

玉露證話七云從五位下姓藤原江戸彦五郎忠道男常州水戸城主江戸但馬守重道天正中為佐竹氏所滅嗣絶新田義貞を失口と殺せし江戸遠江

守末也結城宰相幕下結城晴朝賀之在多見先祖之喜多見若狹守重右元禄二閏二月三日身上滅亡とける是義貞死去三百年月當り

崇之といへり或云江戸ハ言山重忠一族して鎌倉時代之大名

○江戸太郎重長又頼重小野照神社霞山稻荷兩縁起にも出たり但元弘中江戸遠江守ハ此重長之孫也武州矢口にて新田義貞を殺

せし豊新田神社縁起も出太平記も出たり此遠江守宅地跡といへるハ武州多摩郡在多見村田の中小在り又慶元寺と云く代々の

墓あり

江戸下野守 遠江守 太平記

又云江戸太郎重長ハ頼朝公兵を上げ給ふ時相頼小人々の内

重長次男 江戸小次郎武重

或常元 江戸彦次郎常光

江戸刑部丞頼忠 北条家ノ属セ

江戸旗津守朝忠

木多見若狭守勝重

喜多見主水正

同 喜多見五郎左衛門重恒

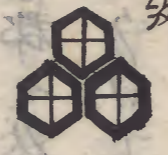
同 伊丹大隅守

勝重病死後次男五郎左衛門重恒家を継数年勤仕老衰後寛文十三

士子正月隱居宗出と改

五郎左衛門重恒子 喜多見若狭守重政

定致



御書院番頭御側御用人天和元從五位下一万石貞享三寅年
一万石加増都合二万石内十石喜多見領家
御勘免外來名城主松平越中守定重上御預

或云江戸氏祖江戸太郎重繼末葉江戸太郎重景

江戸豊後守重高

小野左馬助高政

武徳編年集成云慶長七年正月十八日小野源右工門高盛始て拜謁

是ハ江戸豊後守高繼孫左馬助高政子也御居城の地名故江戸を

改小野ト称ト云

兵家茶話云江戸豊後守高繼新田家ノ從心長尾但馬守共ニ政吏

を執新田足利ニ而数々村を領し天正十四八月廿七日卒ハ六十三

才其子右馬助高政江戸ニ至て 神君を拜し江戸を改小野ト称

慶長五年信州真田陳軍功ヲ勵シ元和元年辛丑五月廿八日高盛高政遺領
を相續トス

江戸民部大輔頼介 建仁二頃ノ人哉柏木圓照寺縁起ニ出ス

江戸民部頼盛 鎌倉時代ノ人哉一萬五千町領ス

江戸左衛門尉能範 北条九代記ニ見ユ一萬五千町領ス

江戸八郎 同書ニ見ユ一萬五千町領ス

○江戸の地ハ凡豊嶋郡小川南の方三田白銀品川に至リ以テ小荏
原郡ニ然ル小御城近辺より芝山手青山四谷雜司ヶ谷巢鴨下谷浅草
へかけてハケ峽田領ハケと云又南のハケ麻布領品川領ハケ
一ハケ峽ハケと云山間の狭き処を云当國方言ニ山の片岸をハケと云

小丘の行かよれの処をハケの下と云又土の穴落する所をハケとも
がけともハケの方言なるハケ当地の地勢を考ふる小川より西の方
片かよれの地多しと云其片岸ハケ作りがけなる田をハケ田とハケ
よし倭名枚郷名ハケ今廢してあまハケ多し豊嶋郡の内湯嶋のこ
存を又荏原郡内小有る櫻田郷存をハケとも今ハ豊嶋郡小入り也
且御田今三田と書を又風土記小荏原郡赤坂の庄あり是も今ハ豊嶋
小入り也其外豊嶋郡小湯嶋神田箕田の郷あり其内神田ハ倭名枚ハケ
ありハケ小郷ハ中古の庄と云類ハケて領といへるも夫小同ハケきこの
各村ハ其中小ありなり

江戸の地ハ凡豊嶋郡小川南の方三田白銀品川に至リ以テ小荏
原郡ニ然ル小御城近辺より芝山手青山四谷雜司ヶ谷巢鴨下谷浅草
へかけてハケ峽田領ハケと云又南のハケ麻布領品川領ハケ
一ハケ峽ハケと云山間の狭き処を云当國方言ニ山の片岸をハケと云

江府往古地理考

抑江府往古の地古記によつて考ふる小東方低く汝入芦沼原のこ多し
十町と云はる地境を蔽葦生ふる沼地或洲崎汝入の地也
今環町濱町辺茅場町八町堀辺小至り皆沼地也

西南の萱原廣原よりて武藏野小續りいつくを限りと云ふき方あり
今三田麻布高輪目黒四谷荒谷辺へうけて廣大の野原多し土地高
且く小山はくちまきり今山の手と云ふつとく北の方の沼池多く又瀬
谷々々る芝野叢生茂り夫を東に寄り海辺小近しと云ふ事あり
北の今の本郷野辺へうけて高く下谷浅草の地脈相接くといふも
低く草自然小茂り東方今の本庄深川海岸洲崎東南小奇木挽町葉
地辺と海江小はるりといふ事あり
御城地の構と小く堀と狭く門塼とてと疎畧の跡ありと云ふ事あり

城郭の地は今の御本丸中の御門より内計まで西御丸辺のす

或云御城地の國主の領地と居城の地は故至て疎畧然るを関

八州の太守御座城と成るべしと云皆存奇らぬと云ふ事あり

御城地御見立の砌白鶴舞ひけるを是万代の吉瑞成とて忝くも

御座城と定めさうと給ふと云ふ事あり

國初御創業より御城御造営有神原式部大輔殿御用懸其外青山藤藏

伊奈熊藏板倉四郎左門被相勤御城辺石垣築立堅横の堀其揚土を以

て地形より川筋より水除の土居を築芦原を干し立諸々小船入の堀川

を通し諸儀大夫大館小舎寺社地所屋に至る迄刻渡さきと云ふ事あり

或云御城地西北の方今の番町之御旗元小舟元宅地を最初と云

き園の土を平均し谷を埋め地形普請と造作なき思召成る由内藤

金左衛門天野清兵衛兩人承之と云又東南の方今の八町堀辺潮除

の堤を築るべし芦原の水を落とへききめ之夫より舟入の川を
掘せ其土を以て地形より町屋を割付大諸侯の館舎を賜り
夫より海外一統の神恩小浴日々繁茂の地と成り随ひ諸國より
工商の輩群集し賣買の市居立つるまきまきとほる遠くより小廣地
草小としてあきと詠せし武藏野七次宮に敷ひて露かくへきすれ地
もなき軒をほり椽棟を並へ萬國の秀士大都會とけり如く本國
の濱れ幾く又天下の人民入辺故田畑の養ひ自由あるれ昔ハ茅の
生ぜし一野原の上々の畑小開き立と新らる小開きし村里数限り
あり御城を始て武家寺社等へかけ之大方の地取るれも又田畑
地の増へるは以前より十倍して万民安居を蓋此境前ハ大川有て船
の通路より南へ入海より萬國より入津有西へ高く見切

刺へ近國の山方へ
御創業の因初より如此未代に至り繁昌の勝地あるへきと
大神君の御堅慮誠小感伏し奉ふも恐在り
右岩剱夜話 落穂集 事蹟合考 江戸名所記等の意を以て記ス

御創業の因初より如此未代に至り繁昌の勝地あるへきと
大神君の御堅慮誠小感伏し奉ふも恐在り
右岩剱夜話 落穂集 事蹟合考 江戸名所記等の意を以て記ス
御創業の因初より如此未代に至り繁昌の勝地あるへきと
大神君の御堅慮誠小感伏し奉ふも恐在り
右岩剱夜話 落穂集 事蹟合考 江戸名所記等の意を以て記ス

武城興基

太田左金吾持資入道道灌築之

人皇百三代後花園院御宇康正二丙子年巧匠ヲ始メ翌年長祿元丁

巳四月八日土木ノ功成就誠ニ日本無双名城也但此地ハ今西御丸ノ処ト云

當寛政元己酉年ニ至リ凡三百三十四年ニ及ヘリ

使千代田齋田寶田三氏之家臣武州江戸川越岩築同時ニ築城墨云ハ
されハ万里和尚此城の勝地を慶々古詩を引照を改て 窓舎西嶺千
秋雪門繫東吳万里舟

未代小至てハ繁栄極リなき地とあるヘト宜ひけるハト云
かく万歳不易の臺トハ形ると本朝三國志小出より

京都公方足利義政公称東山殿也享徳三甲戌年足利左馬頭成氏称古河御
所上叔憲忠を誅せられてより大小乱を官領山内上杉兵部大輔頭定
と扇谷上杉修理大夫定政と不和よりて戦ひ数度小及へり扇谷定政

旨將少して管領頭定の謀略小陥入らる上杉家股肱の重臣太田左衛
門大夫持資入道道灌父ハ清和帝苗裔源光祿頼政十世の孫備中守資
清入道道真なり

道灌ハ江戸の城小住一称左金吾二十石初名源六郎文武達人能城墨之地
を知る故小世小軍法師範と称を若年より城を攻る多多く毎々小戦

功有り惜ひるか文明十八年七月廿六日咎れくして誅罰を加へり

定政の家臣曾我豊後守小江戸の城を守り一免永正三年小至て定正

の男五郎朝良朝良移り住り次小養子修理大夫扇谷朝貞居城とて道灌息

太田源六或資六郎康資舍弟源三其恨小よつて小田原北条新九郎氏綱と通し

大永四甲申年江戸の城ハ押奇る朝貞を亡きり此時朝貞不叶して川

越ハ落行是ハ北条の領地と成当時本老小富永四郎左衛門二凡小遠

山四郎右衛門を差置杏月亭小太田源六郎資康大和守資高兄弟を置

る氏綱の氏康氏政氏直迄四代北条家小属也夫の上杉朝興北条を討
て憤死を散せんと享祿三年六月武州府中玉川にて相戦ひ北条氏康
時小十六方上杉小打勝氏康の臣遠山丹波守頼行豊嶋太田大和守資
高を城代として置き太田資高北条を叛き安房里見義弘と心を合せ
遠山を追落さんと企て氏康小打負時小永祿七甲子年総州國府臺合
戦く此時遠山留永も小戦死を跡九郎の葛西小居城天正頃北条
治部次補遠山左衛門佐景政城代として置き
家忠日記曰天正十八年庚寅八月大朔日武州江戸城小移り給ふ是を
俗聞東郷入國小云江戸城の遠山左衛門佐景政居城く景政は北条小
属して小田原城小河り其旁川村兵部大補をして江戸城を守りしむ
景政は甥遠山丹波守兼真田隠岐守と二人志を以て御当家小通し江戸
城へ移り給ふ案内者として台所小先立て江戸城小來り川村兵部

太浦及景政の從卒を江戸城より出して渡御をあり奉る此功小依て
遠山丹波守真田隠岐守各五千石を加賜ふと云云

又云天正庚寅豊臣公相州北条氏政居城を責終り落城小田原城に其
頃遠山小田原小籠城す河村を江戸の城に遣遠山景政甥丹波守直
景小真田信尹と心を合せ御當家小帰腹に城を献し奉る夫々関八

州の地都領國と云

小田原御并領のり本多中務榊原式部置之是迄御領三遠駿甲信小
代りて武相豆上下総上野國替

話

石洲夜記集云関八州大神君御領知と成り得共御在城の義はいま
も何方より被仰出づる小依て御旗本の諸人の積り十人ヶ七八人々
相州小田原と推量仕り其内二三人と鎌倉にて有へきふと申者も何
り然る処小秀吉公と御相談の上りて武州江戸を御居城と被仰出

付諸人手を打て是ハ如何と驚くもかり下畧

長祿元丁世太田氏始築ヨリ文明十八年丙午迄三十年在成長享元丁未定正附ヨリ三十七年之間

大永四甲申年ヨリ天正十七己丑年迄北条領地と成六十七年御當家小属一
天正十八庚寅年ヨリ寛政元己酉年小至リ九二百年小及

天正十八庚寅年八月ヨリ御經營在之同九月十日 御安座是迄ハ今

名護屋御在
陳苗守諸土
此支ヲ勤御
終理同二年
成就

の御本丸中の御門ヨリ内許ヨリ西御丸の地と云 文祿元壬辰七月十日武城經營始命を奉て松平主殿助家忠藍之
同二己三月三日經營成
慶長十一丙午年三月朔日江城經營始

此時御城郭御擴ゲ御本丸西丸五丸三丸吹上リ至ると云
武位編年集成云 慶長十一年二月十日江城經營手傳の諸侯武江ニ

群参シ陪臣ヲ豆州ヨリ遣ヒ運送セシム同三月朔日江城經營始本城ハ
矩繩元ノ如シ二三ノ丸ハ藤堂和泉守高虎繩張ヲ以テ郭内ヲ廣ケシ

石垣高サ十間十二三間惣石垣ノ分七百餘間云云佐久間河内守正
寶奉行

四月十一日江城天子ノ經營伊達政宗訥望メ其二重目ヲ經始ベキニ
変ニ彼繪圖ヲ政宗臣梅村出羽ニ渡サレ

五月五日烈風甚雨品川沖ニ於テ城藁ヲ爲運送スル石船若干破レ海
底ニ沈ム就中加藤左馬助船四十六艘黒田疏前守舟三十艘錫嶋信濃

守舟二十艘ト云云
六月十日江城經營組々ニ分ラレ大畧造畢ス又一万石ニ百人持ノ巨

石ニツ宛ノ積献スヘキ旨命アリ時ニ加藤清正諸將ヲ勸メ彼大石百

二百五十三ツ、ヲ各献シ畢ニ又願ル御志悦ト云云

九月廿三日江城本丸經營造平 台徳公御移徙ト云群臣藤堂高虎今

般江城終業ノ矩縄ヲ泐汰スル勞ヲ賞シ備中ノ内二万石加ハ賜フ

△同慶長十二年四月蒲生伊達上杉家上佐竹越後ノ堀溝口村上等ヲ以

テ江城本丸ノ天守ヲ經營アリ其二重目ハ伊達政宗一人ニテ是ヲ造

ル天守臺石垣等ハ南部津輕且信品國東ノ譜代ニアラサル十万石有

余ヨリ一万石返ノ族惣高百万石ヲ五組トシテ四組ニテ石ヲ運送ス

一組ニテ是ヲ築立ト云云

又四谷木戸喰違小高勅兵衛昌盛造ル処ト云此門際大榎数株逆茂木

ニ植ラルル今ニ生茂レリ

慶長十六年辛亥年三月六日御城經營始同七月九日御移徙

慶長十九年四月八日金城經營始ル諸侯御移徙在

江御外堀御門寛文九古圖ニ今ノ半藏御門ハ弁形アリ外路所口トシテ

東札之辻ト云

筋違ハ神田口水在リ茂草御門ハ橋ノ底ニテ茂草橋ト記シ此ニケ所

外形無之建札ハカリ之

○元和八戌年四月廿三日御城經營始リ同十二月二日成御移徙ト云

○寛永元甲子年四月 西御城經營始リ同十二月成

同十一月甲戌七月廿三日西御城過半々上

同羊九月廿三日御移徙

同十三丙子年御城石垣外堀見附外形等御造營諸侯由手傳

同十六巳卯年八月三日御臺所出火木殿悉焼失然ト云天守矢倉多門

等無別条此日大雨也

同十七壬辰年四月五日經營成御移徙

明曆三丁酉年正月十九日御本丸二二三九御櫓天守等悉固祿西城紅葉山無恙

同羊御造營始惣司久世大和候御宇倭國部美濃候牧野飛騨候戌年石垣築立加州犬千代候其外此節類焼無之諸候ニ被命三年日亥年皆出來同冬御移徙但万治二巳亥年九月五日自西御丸入御

○御本丸東向 ○北御丸 ○二御丸朝見坂 ○西御丸

○三御丸今朝鮮馬場也ト古江戸田ノ内ニ見ユ ○五御丸往古城郭ノ地ハ千代田村寶田村祝イ村ト云ニ地ノ由

御金城松川御城ト云ヨシ元千代田城又平川城庄云トゾ此ニ

東都紀行

あはれやむひぬ草もかりり日の光り汚る松の密り

江府紀行

風不鳴條ヤ仰太平武威全備武陽城君臣明徳扶柔徳四海浴恩歡

樂声十四丁上平場

紅葉山西御丸の間御本城より未申の方

大木生茂り各御灵廟有り紅葉山の名往古より在り名ある

四谷西迎寺紅葉山有り由故小山号ハ元紅葉山ト云此寺ハ太田氏

家士伏見勘七郎開基して寛永十二今の地四谷北寺町小移り彼寺の

器物ハ紅葉山と記しあり又往古紅葉山山王宮ハ諸人參詣より

由を古き書物より此山王宮ハ御入國の砌ハ北の御丸小坂の上

小有一を紅葉山ハ御移しあり 秀忠公後年御建立して後小寛永

中上野境内小辻と云然し是ハ別の御宮ありや

或云太田道灌文明十年六月廿五日於江戸城外建山王權現堂荒

神皇正統記と云云又云文明中太田氏川越仙波星野山王宮を此
地へ遷座ゆりと云是今の永田馬場の御宮の更へ延位中貝塚遷るも
万石二今の地小勸請と云

大権現宮 御宮 紅葉山 正位二乙酉賜
神祖宮號

大猷公御建立元和四年茂草寺境内小鎮座ゆりしを寛永中此地へ遷

座ゆりと云 慶安三寅年御宮小鳥居建 此四谷北寄り外木の

御靈廟 八日 十日 十四日 廿日 廿四日 御仏殿より

御宮より唐銅鳥居建つる稻荷社ゆり是当御城間基道灌入道を祭

せりと云

寛永十四丁丑年紅葉山 御神廟造營 小笠原右近大夫忠貞營監

宮作り嬉しき神の御心と千歳や告て鶴も立舞ふ

三流更ふよと千年いよとせ友霍の翼あはゆる神の廣庭 鳥丸光廣御折
節參府にて

又崇めよん神の誓と白鶴の齡を君々代々小かきて

事ゆらけ今日小葵の諸かつかけてとかりる君々

大橋右門貞政
入道其部少法印重慶

静勝軒廢址 富士見の檜の辺と云

太田氏当城築の頃一軒を作り爰小諸の書籍を置いて常小遊居せしむ

と云博識の僧侶をして江城の記或詩序を作しし江亭の記其文略

先小出を鎌倉志小委し相陽在柄社小綱ゆりと云然る小南向茶話の

説小駒辺吉祥寺小本書ゆるといゆり又和哥を好平生賦する処の詠

家集碎玉類題と云又慕景集小和歌出し然る小寛正中上路して源

茂政公小謁し時小勅使来て武藏野を問小即和歌と詠を

露置ぬしとゆり夕立の空より廣き武藏野の原 道灌

又平生の眺望を問ふ

我庵ハ松原統基海近く不盡の高根を軒端より見る
此時叡感のあゆみ御製を賜ふ
同

武藏野ハ高きやのミと思ひし小のりる言葉の花や咲らん

又文明中上洛後政公小謁する時角田川都鳥を勅問有り

年少れと我よりあはぬ都鳥隅田川原小宿の河をとも

文明六年六月十七日於江戸城心敬を招き和歌会有り顯江戸歌合云

文明八年八月洛陽高僧南禪寺村庵蘭波建仁寺天隱正宗相国寺横川

小江戸城静勝軒の記を書し同九月湘山得公相陽中栄阿陽東觀江

亭記を書其後相国寺萬里建仁寺王隱笠雲静勝軒の記を書と又五岳

英僧江戸城に來会して詩文を賦ス文明十三年三月三日湘山五岳英

僧汝招て詩哥会有り
文明十二年水無月上京結城三郎兵衛藤原重純小笠原九大夫源忠貞

在江城小浅し置と平安紀行の見し詠歌右筆記ニ出ス

○頭巾松 郡城外の右に松をてりて樓多しと云

○船見山 西御丸御休息間前芝山と云ふとせいつれと道灌の旧跡

新安寺高小新井君美云静勝軒の当本城の支に有すと西城の首小

○本城の址と云ふ舟見山と云ふ在て外よりみへを極て高く國府

臺をといふの届く程小見へ此処古のの本城と存し当時櫻田大寺御

門を昔の泊船門と申此辺迄南の海と云ふ比企谷門より外ハ

海とて皆々地形の築立直されし由夫古今の地震小の甚と云ふ地ハ

萬里記小符合せし所ニ有と云

○富士見御櫓 一名倉雪樓又泊舟櫓と覺杜子美の詩の意を以て飾

られし八方正面三重く此樓小登り西を望めし富峰の雪聳へ東ハ

海水漫々とて万里の舟を泊る有衣服下小有り 東國紀行云天

正十二の頃一日天気よくて江城小来り江戸の城小遠山甲斐守
居るも

○玉まゝ水花小河けり千里の

富士見の亭 武藏野の眺望ありとばきくると云又云東の矢倉

又菖波山の亭とのや遠浦帰帆武藏野をばきくるとみたるに

川のちる夕月夜盃とつりきり

○圃と君と白雲此りさ手小霞む山かふの根

○辨慶御櫓 御玄関前

慶長御造営之時京都大工兵慶小左衛門と云者作る処より名と成

○吹上御庭 往古此辺沼河多く是小望りる高き地なる故吹上と号し

あふんと云又とく為沢と云地のす又坪根沢とも号す

此地小今の茂草新寺町善徳寺東林院有る慶長の頃今の地小移り又
聖徳寺も其頃此地を馮喰町小移り又其後今の地小移り云云

○梅林坂 平川口の内

○文明中太田氏川越三芳野天神を此処小迂うれて並木小梅樹を数種

植られ故小梅林坂の名有り然るに天正十八宮居と平川口御門前部

堀端小移り其後具塚小迂ニ今荒町平川天神と云

右山王天神ハ元廊城内北の丸小坂の上に両社有る山王宮ハ紅葉

○山小迂りれ天神宮ハ平川口堀端小移り云 秀忠公若君紅葉

○山王宮ハ部社参の支所其後上野今の地小迂座と云

○牛込正藏院草刈薬師ハ元梅林坂小有り云太田氏開基年代不知

元和の頃牛込今の地小迂云

○塩見坂 梅林坂上

○梅林坂上

○此所より海より見へて臨り来る時は波此辺へよると見ゆ故に
此名河の今の家居りかゝれてと云

○臨見坂御門 其の梅林と追手の間 其の間に六田の園 其の間に
○梅林御門 其の平川口の内に其の園 紅葉山下御門 其の東の末

○蓮池御門 其の天内櫻田の内御本丸押の方 其の間に
○山里 其の西御丸の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○御花昌 其の北より橋先 其の西より橋 其の西の方 其の間に其の園
○御天守臺 其の竹橋と北より橋内

○慶長十二年四月江戸御天守御經營石垣 其の上杉景勝伊達政宗蒲生秀
行家上義光佐竹義宣轟中秀勝堀秀右村上義明依則台命築之石垣高

○八間六間廣二十間四方 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○明暦三酉年大火の時二重目北西銅窓の戸内を開けて火次之を終り
焼た同翌の亥年迄は天守臺石垣兼直まれば今臺石垣をかりん

○西御丸御裏御門前大樹 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○此樹は槐と云或は榎と云又此地に住居の名主門前と在り所と云又
其頃の一里塚の末と云 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○又長祿の頃迄此辺に農人住し 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○又西御丸の間に野山と云て田畑あり 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園

○其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園
○相州小田原に此地に移され其後銀所辺に移り又夫の浅草今の地小
○うつりしと云 其の間に其の園 其の間に其の園 其の間に其の園
○今本城中御門右の方多門下角石勝まで大いなる臺石今以て世り

○肥後殿石山云是肥後熊本より牽るる所あり也と云ふは今も是れ也
○御郭内東

○大守御門 東向 大下馬 其跡也 山内守 又云 大守 今も此也
十萬石以上御譜代大名方又七八萬石まで勤らる慶長十二頃古図

○今この御城門辺に大守土橋と云ふ橋の左右に伊奈熊藏忠政青山播
大守忠成酒井雅樂助忠世其外屋鋪あり今の大手の所は大橋と云

○り橋の左右青山伯耆守忠俊土屋民部少輔忠直等の館舎あり寛永九
○江戸因に此処に元大橋口と云ふ所あり其跡也 山内守 又云 大守 今も此也

○此のより往古祝村と云ふ所 浅草新寺町万年山祝言寺此地に在此寺
○は太田道灌造立の天文十二年迄夫の天正の末今の地に移りしと

云坂本養王院古の三邊院とて此地に有りと云是相違せり本処は桔
梗御門外に有る三明院と云ふ所は坂本の処小くして出ると云ふ

○和田倉御門 北の邊 入口は西御内 行処 其跡也 山内守 又云 大守 今も此也
此御門は二三萬石の地方勤仕者也譜代方

○慶長古図に此御門内御廐の処は和田藏と在り藏は寛永間迄此地に
○神尾刑部と云ふ所あり其跡也 山内守 又云 大守 今も此也

○御廐 和田倉御門内 大御廐は古の西御内下小あり
○鎮座榎 西御内下今御廐の跡也 山内守 又云 大守 今も此也

○秋葉權現鎮座右榎の木は一本薄と云在りしと云ふは其跡也
○馬場先御門 北の邊 此は谷津内北の邊に在りし跡也 山内守 又云 大守 今も此也

○御譜代一二萬石の方勤仕 往古此の方皆田畑ありしと云ふは元不^ズ明
○御門と云通路ありしを寛文八の橋を掛られ往來成る所也 山内守 又云 大守 今も此也

○馬場 右御門内より 明暦元九月築ると云ふは其跡也 山内守 又云 大守 今も此也
○八代洲河岸 又八代曾根 又右容子と云ふ所は其跡也 山内守 又云 大守 今も此也

和田倉より馬場先迄の御堀端を云往古此辺御師町と云一右客子
 ○八官と云異國人渡りし時ヤヨウスニ此処を給り八官ニ今の八官町
 を給るる名と云キリニタニヤス寺在り今火消屋敷の辺
 ○慶長記ニ云慶長十九甲寅年九月朔日阿蘭陀人來り耶揚子虎の子ニ
 天を獻じ給るるに對し本寺ニ奉納す云云
 ○江戸方角安見圖ニ云御城築之時町刻をせし跡與三と云者ニ給り
 ○此地多る故彌與三河岸と云説せり信用あり
 ○江戸志ニ云耶揚子ノ屋敷を給り以前は名見當らん耶揚子給り
 ○慶長十八十一月の亥ニ武徳編年集成に出是吉利支丹御制
 禁の時回カ忠をせし出する臺夷の語あり
 ○△此邊此邊此邊小深川法禪寺有其後馬喰町上寺町へ移ると云表不知

或云ヤニヨウスニ屋敷拜領して五十人扶持被下此者本國ノ帰
 る節路中ノ難風ノ所ノ果るに因りて
 ○電ノ口ニ御堀吐水の川此辺迄潮う入る
 ○慶長因此地南角ニ蒲生飛驒守秀行元羽柴ノ茅宅ニ慶長十九戌年
 台位公此茅宅へ被為成と云
 ○武徳編年集成ニ云慶長十六庚寅年正月三日江府竜口蒲生秀行宅失
 火隣家池田三九衛門輝政宅類焼と西館各去年御成ニ依て新規
 宮作也蒲生殿舎蘇略ニ其門ノ仙人羅漢を彫刻シテ美麗を尽シ
 ○世ニ日暮門ト称譽シ今日幸ニ此門火災ヲ遭ルト云
 ○往古此ノ平田村ト云其所の鎮守を平田明神と云先年比
 やりき土屋候久敷居住所ノ享保の末ノ屋鋪替の節小川町へ此や
 一ろを移され平田一説ニ鳥居の額ニ十田と有る其跡

小祠残り近年松平右京大夫殿其後本多彈正大弼殿寛政十一年戸田
采女正殿也住宅と成今之由館内平田社稻荷社と並ひ匠平田祭礼
不知此の事と云平田林の事と云其の事と云平田社稻荷社と並ひ匠平田祭礼

○大名小路門は八代洲川岸よりあり云々

○徳馬町舊址田三式神門跡也其の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

或曰今の竜の口吐水下流御堀南北端の所屋下通を河に此辺より河
るへくと云然るに徳馬町の慶長中移るといへるに此辺より八代洲

河岸の所はて所屋の事二の因道はつて此所々所名をれを又
何方へうつかぬや不知此の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

○寛永九の図は今の評定所の角辺小職人町と河り道三河岸の所小
池の事と云其の事と云其の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

柏崎永以著を變つ序と云各云々

○江戸上宿人足問屋吉澤主計の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

○同下宿問屋馬込勘解由の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

○馬借問屋宮部又四郎の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

○按小此地往古の賣田村千代田村あり此処は三人の者居往
て問屋役取場勤し慶長十一年御用地と成今の大小南徳馬町の三

ヶ処へうつされし事然る小や今も大徳馬町馬込氏地所小室田稻
荷の宮居あり南徳馬町一丁目吉沢氏地面小千代田稻荷の宮居あり

○傳奏屋敷の事と云其の事と云其の事と云其の事と云其の事と云其の事と云

○武家傳奏の公卿勅使として毎年奉向旅館

○按小慶長五關原陳前の公家礼奉向之者無之 御一統の後毎年

泰向河より依て新く之に建られしと云

○御評定所の同所南北に並ぶ古園に今の八代洲川岸の御評定所と云

○初ハ傳奏屋鋪して評定所寛文中頃分別小此所を攝へられ寛永十

三年正月廿一日の評定始メ在りしと云

或曰同十二年十一月廿六日始て寄合有之と云の事

御評定日式日
二日 十日 廿日 廿五日
立合 四日 十日 廿五日

○宝永橋の御評定所前小の御評定所享保始火災の後脱河るへ

○御普請定小屋の御評定所前小の御評定所童山の御評定所南河岸の御評定所

御作事方小普請所の御評定所童山の御評定所南河岸の御評定所

道三橋の御評定所古園小彦次扁橋と云

今大路道三法服宅地の前ふるゆく此号河より御評定所大御所御評定所
食禄五百石を給り寛永五年辰十二月十日壽八十三物故

○道三井戸の御評定所今細川家籠内小御評定所と云

今大路氏掘りせし井冷水多しと云

○道三河岸の御評定所龍ノ口吐水堀端の御評定所古園小醫者町と云

或云此地ハ慶長頃柳町と云て傾城所と云慶長十一年御用地と成代

地元誓願寺前小うつさると云神田の元吉原を開きし庄司甚左橋

○門七柳町小居住せしと云古江戸園小此つらつを内河岸町と見く

或云此処ハ國初の後材木の商人軒を並後小今の材木町へ移さ

○錢瓶橋の御評定所常盤橋の御評定所長服橋の御評定所の間

實ハ錢瓶橋と云すの御評定所區説河り畧之江戸志小錢買橋ありんと云

○千代田稻荷社 常盤橋御門土手小有

古く此の通り迄千代田村と云ふ所あり千代田の御城辺の

いづれの上に云如く南俣馬町小河の処と同名之猶尋へし或云此宮居

の上然國の神職の持と云ふ所あり

○町御奉行御番所 常盤橋内北市番所と云文化三年より兵服橋内被徒

按武鑑の元禄の頃を記し然るに寛永九の古図に今の御役

宅の所が牧野内通今加々丸民部と云ふ所あり

○常盤橋御門 大手御門通り本町へ出ル御門也

此御門は譜代大名三万石にて勤仕ゆる慶長古図に浅草口橋と云

常盤橋より以前は大橋と云呼ぶも古く平川の流れのわきまでありとい

改まり正保の頃よりと稱する

河を寛永九の図に追手を元大橋と記し常盤橋と大橋と記し

○兼志の園小とき又橋と云江戶破子其外も万治中小兩國橋懸

り是を大橋と呼ぶ此橋と常盤橋と改り松にいと左にあ

らる是は前にもやとき大橋の名あり古く浅草東光院薬師此常盤

橋の北小右其後小俣馬町へ移るといふ其所あり又柳草

子師大久保氏小右其後下養の狂哥す大橋と云ふ

此(本)は

○兵服橋御門 兵服町へ出ル御門也

此御門は御譜代一二万石にて勤仕元後藤橋と云ふ御兵服師後

藤源丸衛門宅地ありといふ今の後藤氏祖也

○鍛冶橋御門 町へ出ル御門也

同一二万石の方御勤仕此御門内今河波大守館舎の地小浅草鳥越

寿松院小田原と云ふ所あり文禄三甲午年其後柳原雁

○今の土手元所奉行所三所の頃此処が在りと云是慶長頃今享保四年正月迄は相止

○高倉屋鋪門 八代洲河岸 寛永頃高倉中納言殿出用の夏有て年を経て居らるゝ処

○桔梗御門 大手の南大手の格之内櫻田御門と云 或説小寛永御上洛の時也（本）柳宗の祝表を表され此御門建と云

○江戸志云小野高尚所持江戸古因小吉慶御門と云 南白茶 詔云二九辺吉祥庵と云河は是賜辺吉祥寺之故吉祥御門と称と云

○坂下御門 按小吉祥寺最初草庵之太田氏建立其後遠山丹波守再真天正十八頃水道橋向ううらうらと云

○西九大下馬 内櫻田は十萬石以上御譜牒流勤仕

○慶長十二の図小此御門辺小阿部備中候青山大藏候館舎河

○二重橋 西御九 此処より品川沖江戸中目前小見絶景云をかりありと云

○櫻田御門 西御九下五六万石也譜代流勤仕 此御門外を外櫻田と云 落穂集小内入國ノ第小此御門ノ処小大

○小首の村の名々 竹森物語小 新守寺筋小云櫻田大手御門を元泊舟御門と申せし由是ハ内櫻田な

るへし同春云國初迄ハ彼日比谷御門辺りハ西南大手迄ハ船入の入

江にて船と今之西九下の屋敷近き処小泊光 故ハ八代洲川岸

中畧 関原没後大名と追々入来られしと漸々東西の地水を乾し
地を築町し屋鋪し成今の櫻田の殿の水の内して有し此仙臺
正宗侯築立られ此時急ぎ材木を下りて土を積み築立られ故地
震りて彼辺家を損せし事既小三度小及ひし今の櫻田御用屋鋪
○日比谷御門 外格田御門東 外様一二万石ノ方勤仕
此辺往古日比谷村と云之北条合限帳もさう此内より入江の
て堀師住せしを今の芝口日比谷町々此所の引水は之或云今外
櫻田辺水道普請して深く掘る時ハのきりく杯多く出ると云ふ水ハ
いりく海岸にて河りてあり

○数寄屋櫛御門

とさや町へ出る御門 万石以下奇合罷勤仕

○町邸奉行所

とさや橋の南邸番所と云

○武鑑慶長頃の先中役を記したり寛永図小此所小くとも呉服橋并

小嶋田彈正今掘式部と記し

御城西

○半藏御門

糺所へ出る御門 四譜代又外様四五万石ノ方勤仕

寛永頃の図小小路町口とあり

○旧芝草話小云じく此所小服部半藏正成の組屋鋪有し此名所

りと此正成父石見守正種と云正成ハ其頃畧半藏とて武勇の誉れ

あり又元禄二年の江戸図鑑ハ此御門内成鼠穴と記せり江戸志云

今の葱葉山下御門を鼠穴御門と云く是

大猷公御代の芝々其頃図小記亦云按る小半藏組屋鋪の芝と紫の

一本し記し此芝うかじ記し寛永古図小半藏御門内外形の

○側小服部半藏屋鋪河れハ直小半藏御門と申けり

○半藏山 江戸砂子小云井伊家中屋敷を云是も服部半藏組屋鋪有

おのの

大瀬名貞雄云此説紫の一本もいふれと疑し今井伊家上中屋鋪共
今小郎入国以來加藤清正小給り其後西屋鋪と一一度井伊直孝小給
りし多分明之然れども清正拜領以前とすや暫しの内半藏組屋鋪
敷とありをり少や

○加藤肥後守清正宅旧地 井伊家館舎北北之

寛永九年七月十二日上中屋敷共小井伊家拜領在く加藤清正ハ寛永

十六年卒すと云

○寛永十三年江戸郡城石垣掘町見附松平長門守秀龍町場へ

○兵庫堀 井伊家上屋鋪前の所堀を云

江戸砂子小兵庫小左衛門繩張故志と云とせ 落穂集小云東西大石

お込の所堀普請小とて西東の武藏坊を申心小云ありしりしり
りし記せり此説ハいひのありや

○御三家館舎 寛永古図々弟忘中迄の図小御三家とも御城西の方小

並ハ南の方尾陽公中水府公北の方紀伊公之明暦酉後々各今の地小
移らせしり

或云元和頃ハ尾州公ハ吹上御門外水戸公ハ扇指荷の辺紀州公
ハ屋形の北と云吹上御門外後年月光院殿ワセしり

御城北

○平川口御門 古ハ平川町へ出る御門少ハ此名何

此御門御先手頭並子刀同心勤仕あり
之川村旧地上下二村あり今の大手辺へりけて志と云ハ天正の末

梅林の天神宮を今の平川口邸堀端へうつし其頃此所小町屋向
りたゞ一今の下町といへる一町となりしと云慶長十一天神社
と町も一同小貝塚小移りれ今の掘所平川町と云是く 慶長十二古
岡小平川内小青山権之助辰同図書辰本多上野介辰と屋鋪河り
或云往古牛込平川寺赤坂浄土寺平川山皆此地小在麻布東福寺久明
八平川小安置太田氏建立慶長九々神田小移其後今の地小移つる
本所法恩寺の文正中太田氏平川村を建らる其始本住院と云故小今
も平河山と云其後柳原大寺下寛永頃小明暦の頃迄の岡小く又元
禄頃小谷中其後本所小くつと今小境内小平川清水稻荷と云河り右
寺院等平川村小有しと云其頃小本所小移りて其頃小本所小移りて
△平川と云一流き古くありと云其名あり

梅小相山暮撫得の江亭記小云江城東に平川と云流しありと云此

- 平川と云一江戸川の流き今の土寺三崎稻荷辺入り入飯田町下
 - 真那板橋の筋を通りて橋の外東南の方小流き今の常盤橋其頃の大
 - 橋と呼ひ此橋平川の流き小切なる也云夫是東へ油所濱町の方小流
 - きと平川と云一古書を以て考るにさも有しと云又今の丹藤
 - 駿河候屋鋪の処より江戸川平川へ落入りて夫故右屋敷小今も其川
 - 筋の残りとして池あるより江戸川平川へ落合と云此と云浅草川
 - へ落し是今の神田川又右の平川を隔て南の方を江戸の郷と云北
 - の方を神田郷と呼て柴崎村あるより一
 - 北反橋 此竹橋の内
 - 邸鷹部屋 此同所 朝辨馬場向
 - 紀伊國坂 代官町へ竹橋へ下る小坂を云此
- むく尾紀兩郎館有し故名づくと云或云元和頃紀州公邸館へ田安

の方くと云

○朝鮮馬場

の平野を田安郡に属す

○先年朝鮮人曲馬有し

○其処志れを

○御上覽所

山王神田西祭礼此処にて

○松原小路

○古く北北松原の木立

立の邸屋形と云

其續き清水邸門内駿河

○國師屋鋪

増上寺中興普光觀智國師屋鋪

○代官町

○西御番所

○矢來邸門

○田安邸門

此地より東を見

南向茶話云田安の号北条

何りや田安内天樹院

と云古く此辺

此邸門元飯田町口

白銀町と云

瀨名貞雄云古く田安邸門

田安の臺と云牛辺邸門

内辺を下田

○安と申けるより田安明神上古田安の臺よりして後下田安へ移

○永享記云太田道灌川越城乾に在る氷川神社小准く文明十年六月五

日江城乾小田安明神を崇祭ると云云神社畧記云田安明神社説く

て云当社元今の三ノ丸の地鎮座梅三ノ丸寛文因今の鬼下と云

天正十七年牛込邸門内の今米倉家宅の地移して田安明神と称

と又元和二年牛込築土八幡の社地遷座して築土明神と云

○江戸志云田安明神上古田安臺より梅今の田安邸門飯田町辺を云

後下田安小遷座下田安とい牛込邸門内辺を云

○南向茶話云

○風土記又出江戸神社大宝二壬寅年勸請所祭素盞鳴尊此江戸の神

○社云今の牛込津久戸明神へ邸城鎮守して平川村小在り

○由或元次戸と書次と江と字形相似故小誤まりと見ゆ

○牛ヶ淵田安邸門下出堀内河り

○竹橋邸門此邸門ハ也譜代大名三方石勤仕

○舊事茗話云邸入国の頃竹をあて橋り渡されしとの名と云

○慶長頃古會因小此処小橋ハ也明和四丁亥年六月十六日大

雷竹橋邸藏へ落則雷火して邸室藏焼失

○或云中頃半藏邸門ハ内竹橋田安ホへの往来停止河り享保元

○先規の志とく通路河りと云

○田安邸屋形田安邸門内

○享保十六亥年建り徳川右衛門督宗武卿

○清水御門雉子橋の北此邸門右以下寄合最勤仕

○求涼雅記云往古此辺に清泉涌出せり、其の泉門の名とも云く古老の云傳へると云く、其の泉門の門は元朝

○或云小川の清水の邊此処にも又小川町とも云小川町の処小出る

○元廊塩消藏 いりく吹上廊門の方小有り

○清水廊屋形 清水廊門内

○寛延九年十二月松平宮内卿重好卿 松平万次郎君

○扇稻荷社 清水廊門内土手小有別当

○舊芝茗話云寛永の頃天樹院松竹勸請ゆり神休の扇と元田安内

○天樹院松竹館也庭小有、以後爰小移るると云

○雉子橋廊門 橋の西万石以下寄合筋仕

或云國初以前雉子橋外々北の方大なる沼あり是々西方飯田町と云

の末坂下迄入江と在り、小川町に寛永年中外廊建り、以前

の牛辺々の流がどんと橋の向、直小と名の末の方へ流を行又小石

川の流れ、今の土手三崎稻荷の辺、橋の廊堀の川へ流るの、往古此り、に往せり民家廊入國後牛辺に院町迄移るると云

○廊春屋 平川廊門前

○橋廊屋形 橋廊門内

○神田橋邸門神田の方へ出ル邸門 外様五六万石勤仕

上野 御成道筋御成道筋

御入國御り大炊殿橋と云ふ此地の土井大炊候家宅在し

○慶長古図小神田口橋と云ふ

○芝崎村旧址芝崎と云ふ今神田橋内の辺に

○神田神社旧址往古芝崎村或記神主と芝崎七郎大夫とい

○いくく茂りうる木立の其地元田沼候次酒井候小第宅内

東の方今成りもかりの処其印のい何るい手洗と云小流と

何りとや隣柳原家の内つつけりと云今橋御邸向屋鋪の内

當社鎮座天平二庚午年と云後八百八十七年改修元和二辰年湯

嶋臺今の社地辻座何りとや今神田祭礼の幕此目前於て神輿

志つくく止と奉幣何りといくく七と云ふと云云と云と云と

○柴崎道場旧跡 同一辺と云其地とと不知

南向亭茶話追考云平川の北の端と云又云只今の三の丸良外当今

松平右京候居宅の乾の角の地存在神田明神と此処鎮座古花

云平川一水を隔て今の三之丸江戸の郷日輪寺の方神田の郷と

云此所神田郷芝崎村と云くくと云云

是いえ遊行上人二世真教坊草庵と云後神田山日輪寺とて相ノ

藤沢末寺其年代不詳寛永中古図神田今の緋屋町辺何り格

ノ神田社と同時頃うつりいなん又神田今の地茂草移り年

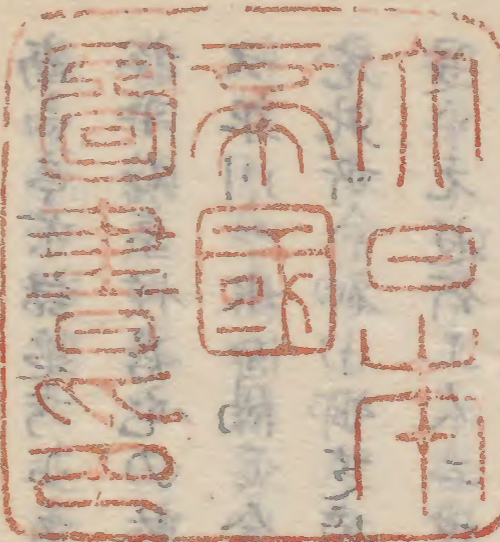
李不知其地と云云

浅草田甫慶印寺往吉芝崎村有りと云是と同一辺同新堀東

漸寺同所在りと云其後駿河臺小移り其後今の新堀小うつとと

云田神田神社の地と云云

神田邸殿と云い元禄の頃今の小笠原家の辺小在柳沢家の第宅に右
 の向今の橋郷邸屋形辺之遊所と云ふ其處今の藤原の所と云ふ
 太田道灌の詠草草景集に藤原の所と云ふ其處今の藤原の所と云ふ
 深夜帰鳥と云ふことを神田之社にてかのくまを侍るとき
 啼つきて声よりくまを侍るときをのぞく物かたなる夜半の雁
 是は神田社旧地亦有小頃の詠あり山本藤田今の藤原の所と云ふ



○此處は神田邸殿の跡と云ふ其處今の藤原の所と云ふ其處今の藤原の所と云ふ

